

高校美術にVTSを導入した鑑賞教育の試行

Developing Art Appreciation in High School Art Department Classes by Using VTS

桑 村 佐和子 KUWAMURA Sawako
新 保 甚 平 SHINBO Jinpei

1. 新学習指導要領における鑑賞教育と 言語活動

新しい中学校学習指導要領が平成29年3月に公示された。美術科の項について現行の学習指導要領と比較すると、「表現」においては、美術作品の造形的な美しさだけでなく表現の意図と工夫、機能性と美しさの調和、美術の働きなどについても考え、「主題を生み出すことも求めるなどの違いがある。一方、「鑑賞」も目標が詳細になるなどの変化が見られるが、特に言語活動の充実を図ることとしている。

「〔A表現〕及び〔B鑑賞〕の指導に当たっては、発想や構想に関する資質・能力や鑑賞に関する資質・能力を育成する観点から、〔共通事項〕に示す事項を視点に、アイデアスケッチで構想を練ったり、言葉で考えを整理したりすることや、作品などについて説明し合うなどして対象の見方や感じ方を広げるなどの言語活動の充実を図ること。」
さらに、学習指導要領解説では、第1学年での言語活動の充実に触れ、「言語活動の充実を図る際には、「何のために言語活動を行うのか」ということを教師が明確にすることが大切である」としている。「単なる話し合い活動に終始」することなく、「新たな考え方や価値への気づきにつながるように、生徒一人一人が自己と対話してじっくりと考えを深められるような学習活動の設定も必要である。」

これは中学校の美術科（以下、「中学美術」とする）でのことではあるが、高等学校の現行の学習指導要領解説でも、すでに高等学校の美術科（以下、「高校美術」とする）における言語活動、生徒同士による

意見交換を通じた鑑賞の重要性は指摘されている。

中学美術や高校美術の対話型鑑賞教育は、生涯にわたって美術にかかわる基礎を作るというだけでなく¹、後述するように、他の教科の基礎となる能力を育成することができることが指摘されている。それは必ずしも本来の役割ではないかもしれないが、中学生や高校生にそのことが実感させられるのであれば、さらにそれが本人の学習意欲の向上に繋がるのであれば、美術の時間が息抜きの時間であったり、重要ではない科目と思われることも少なくなるであろう。

本稿は、高校美術の鑑賞教育の授業を、ビジュアル・シンキング・ストラテジーズ（Visual Thinking Strategies: VTS）によって改善し、生徒自身がどの程度その効果を認識しているかを探りながら、その運用方法と可能性を考察したものである。

2. VTSによる鑑賞教育はどのような力を育てるのか

VTSは1991年からニューヨーク近代美術館（MoMa）で、フィリップ・ヤノウインらによって始められた教育プログラムである。最初は美術館への来館者のために考えられたが、後に幼稚園から小学生を対象とした鑑賞教育の方法として、さらに美術以外の教科にも応用可能な方法として提示されている。²

VTSでは、教師が慎重に選定した作品画像を用いて、児童・生徒が主体的に発見を積み重ねていけるように促す。その際、教師は重要な役割を担うが、

それは知識を教える権威的な存在としてではなく、ファシリテーターとして、作品をよく見る、観察した物事について発言する、意見の根拠を示す、他の人の意見をよく聴いて考える、話し合い、様々な解釈の可能性について考えることを児童・生徒ができるように促す。そのための問いかけとして、以下の3つを設定している。

- ①この作品の中で、どんな出来事が起きているでしょうか。
- ②作品のどこからそう思いましたか。
- ③もっと発見はありますか。

フィリップ・ヤノウィンはこのようなシンプルな問いかけを繰り返すことで、思考力、言語力、記述力、ヴィジュアル・リテラシーが育まれるとしている。この方法は他の教科にも応用可能であり、また、学力向上にも繋がることを示している。

さらに言えば、このようなVTSの取組は、必ずしも児童・生徒にだけ効果があるわけではない。例えば、山口周によると、VTSは昨今、多くのグローバル企業やアートスクールにおいてさかんに実施されている。そこでは、作者や作品に関する情報提供はほとんど行われず、参加者には徹底的に作品を「見て、感じて、言葉にする」ことが求められる。そのようにして「見る力」を鍛えることでパターン認識から自由になることができ、過去の問題解決において有効だった手段が必ずしも使えない状況、パターン認識力の高さがそのまま問題解決の能力に繋がらない、むしろ状況を見誤らせることになる状況で、役に立つ能力を獲得することができる³とされている。(以上、桑村)

3. 高等学校での実践

(1) 実践に至る経緯

高校美術においても鑑賞教育は長年行われてきたものの、日本人には一番苦手な分野ではないだろうか。高校でもプロジェクターを使って絵を見せ、積極的に感想を述べてくれる生徒は余りいなかった。また美術館へ引率したが、学芸員の方の

ギャラリートークでも、彼らの話を拝聴するだけで自分から感想を述べることはなかった。どのようにして主体的な鑑賞者を育てたら良いかを模索している時に、フィリップ・ヤノウィンらのVTSに出会った。VTSはこれまでの先生から生徒への一方的な「input」だったものが、生徒からの「output」を促すことにまず重点を置くという点が新鮮であった。そこでは、教師はファシリテーターになり、生徒の言及したことを指差し、生徒の意見をパラフレーズ（言い換え）し、リンク（発言をつなげる）させ、授業の終わりに、生徒に感謝の気持ちを伝え、「まだ新しい発見はありますか」と尋ね、その日の対話から学んだことをコメントして終了する。さらに、VTSは美術以外の学力向上にも繋がるとあった。ヤノウィンのVTSは幼稚園から小学生を対象としていたが、日本の高校生にとっても同様の効果があるのではないかと考え、2015年度から2つの高校の授業に取り入れ始めた。以下は、そのうちのK高校の、2年間にわたる試みの成果とそれをもとに考察した結果をまとめたものである。

なお、K高校は県内でも伝統的な進学校の一つで、ほとんどの生徒が大学へ進学する。普通科と理数科があり、スーパーサイエンスハイスクールの指定を受けている。

(2) 2015年度の実践

1) 実施方法

初めにパワーポイントで画像を20枚余り用意した。その中から、生徒の様子を見ながら、より意見が出やすい絵を探っていった。特に、最初は絵画ではなく、生徒達の馴染みのものを選んだ。具体的には「となりのトトロ」の一場面である。これは生徒の反応がよかった。2枚目は「Look Mickey, 1961 oil on canvas、ロイ・リキテンスタイン」である。これも活発な感想を引き出すことができた。例えば、「ミッキーは意地悪」、「ドナルドとはからかうことができるほどに、本当に仲が良いのではないかと思った」などである。これらによってVTSに慣れてもらった。

また、始めたばかりの時は、生徒達が意見を話し始めるのを待っていても手を挙げる生徒は皆無だったので、指名し、一人一人に述べてもらうことにした。また、「先生が正解をもっているのではなく、一人一人が考えること—それが正解」であることを先に伝えることとした。

このような工夫により、全員が意見を述べてくれた。さらに、その感想を時々紙に書いてもらうこともした。

2) 生徒による自己評価と考察

表1は、VTSによる鑑賞教育の授業を10回受けた後に、その効果について生徒に自己評価をしても

らった結果である。これは複数のクラスの合計であるが、それぞれ同じ絵を用いてVTSを行った。

「よく当てはまる」と「まあまあ当てはまる」の合計を見ると、表中の項目1、12以外は半数を超えている。能力の向上という点では、即興の能力の向上(項目11)が最も高く、82%である。それは自信と自己主張ができるようになった(項目3、69%)、作文と会話能力が向上した(項目2、62%)、失敗を恐れないようになった(項目4、61%)といったこととも無縁ではないであろう。

コラボレーション能力の向上(項目5)が57%、会話能力向上(項目7)が52%といったように、VTSは言語活動なので、国語力が伸びたのではない

表1 VTSを受けた結果についての生徒の自己評価 (2015年度) % (人)

(VTSを受けて)	よく当てはまる	まあまあ当てはまる	あまり当てはまらない	当てはまらない	計
1. 基礎学力が向上した	3(2)	34(23)	57(39)	6(4)	100(68)
2. 作文と会話能力が向上した	15(10)	47(32)	32(22)	6(4)	100(68)
3. 自信と自己主張の進歩があった	16(11)	53(36)	28(19)	3(2)	100(68)
4. 失敗を恐れない能力が身に付いた	18(12)	43(29)	38(26)	1(1)	100(68)
5. 他人とのコラボレーション能力が向上した	15(10)	43(29)	38(26)	4(3)	100(68)
6. クリエイティブな技術が向上した	21(14)	37(25)	37(25)	5(4)	100(68)
7. 会話能力が向上した	12(8)	40(27)	43(29)	5(4)	100(68)
8. 学習意欲が向上した	12(8)	38(26)	40(27)	10(7)	100(68)
9. 学校で楽しく学ぶことが増えた	21(14)	43(29)	32(22)	4(3)	100(68)
10. 自分の学ぶ態度が改善した	13(9)	38(26)	43(29)	6(4)	100(68)
11. 即興の能力が向上した	35(24)	47(32)	16(11)	2(1)	100(68)
12. 成績が伸びた※	7(5)	13(9)	59(40)	21(14)	100(68)
13. またVTSの授業があれば受けてみたい	46(31)	43(29)	9(6)	2(2)	100(68)

※「12」の項で、成績が伸びたと回答した人の具体的な教科は、数学6人、国語4人、社会1人、地学1人、全体的1人であった。

かと思ったが、項目12に関連して具体的な教科を挙げてもらったところ、国語よりも数学の方が多かった。よく観察することが、深く考えることに繋がり、学びの楽しさに発展した。そのことが読み書きだけに留まらず、理数系への伸びに繋がったのではないだろうか。

また、学校で楽しく学ぶことが増えた（項目9、64%）ことから学習態度（項目10、51%）や意欲（項目8、50%）なども良くなったようである。基礎学力や他の教科の成績が伸びた（項目1、12）という人はそれぞれ37%、20%と他の項目と比較すると高くはなかったが、項目13のように生徒達には好評であったため、2016年度も引き続きVTSを行うことにした。

(3) 2016年度の実践

1) 実施方法

2016年度では、実施にあたって授業の進行に変更を加えることとした。それは1枚の絵を見た後に、記憶を頼りにスケッチをしてもらうことである。授業の流れは表2の通りである。これは脳の海馬の活性化に繋がり、そして最初に絵を見るときに、よく観察することに役立つと考えたからだ。スケッチは全体を詳細に描くということではなく、自分が注目した部分や全体の構図など、各自が気になったところを描くように指示した。

また、最初の映像は同じにしたが、エイク、ピカソ、シャガール、スーラ、ルノアールといった作家の絵を用意した。その中でシャガールの「エッフェル塔の新郎新婦、油彩・カンヴァス（1938-1939年）」とヤン・ファン・エイクの「アルノルフィーニ夫妻像、1434年オークのパネルに油彩」を続けて見せたところ、結婚観の話で盛り上がった。例えば、「マリッジブルーを描いたのではないか」、「古い時代の男性の専制が描かれている」などである。よく見てくれていると感心した。

また、マルク・シャガール「楽園」でも幻想的、パラダイス、不思議だと思ったと言及してくれた。日本人の画家では富岡鉄斎「旧蝦夷風俗図」を見た。

これも熊に気づき狩猟、儀式、精霊などと貴重な意見がでた。図1、2は授業風景である。

表2 VTSを導入した授業の流れ

事例：	
K 高校（普通科、選択美術、23人）	
2016年11月3日3限目 10：30～11：10（特別時間割）	
10：30～	前回までの振り返り
10：35～	授業内容の説明を受ける。 プロジェクターで投影された絵 A を見る （シャガールの「楽園」を使用）（1分）
10：38～	記憶を頼りに A をクロッキーに描く（2分） ※その間は別の絵が投影されている。全体を描かなくても、一部だけでも良い。 （絵 A に切り替え）
10：40～	もう一度 A をよく見る
10：42～	クラス全体で、1人ずつ順に全員が、A に何が描かれているのか、それは何を表していると思うかなどについて発表する。 A について、ワークシートに自分の考えを書く。
10：58～	最後に、作者とタイトルについて説明を受ける。
11：01～	プロジェクターに別の絵 B を投影する。（ブリューゲルの「盲人の寓話」を使用）
11：03～	記憶を頼りに B をクロッキーに描く
11：05～	B を見ながら、グループで話し合う。 ※教員から後から発表することが指示されている。
11：09～	クラス全体で、グループ毎に話し合われたことを発表 ワークシートに自分の考えを書く

2) 生徒による自己評価と考察

2016年度もVTSを10回受けた後に、生徒に自己評価をしてもらった。表3の通りである。2015年度と比べると、学力向上に関する実感が増えているようである。基礎学力向上（項目1、44%）、成績が伸びた（項目12、33%）と、半数を超えてはいないものの、比率は高くなっている。成績が伸びたと感じた教科は、同様に数学が10人と最も多く、英語で8人となっている。これはスケッチを入れたこととも関連しているのでないだろうか。よく観察し、それを

図で表すことが、数学の本質と何らかの関係があるのではないだろうか。それが深く考えることに繋がりと、そのことが理数系の伸びに繋がったのではないかと思われる。英語に関しても、細部に着目したり、全体を把握する、といったことは外国語習得に使われる能力の一つなのかもしれない。これらは仮説と言うよりは想像の域を超えないが、ただこの結果から、少なくとも生徒自身は、他教科の学力向上に繋がったと感じていることは検証することができた。

表3 VTSを受けた結果についての生徒の自己評価（2016年度） %（人）

	よく当てはまる	まあまあ当てはまる	あまり当てはまらない	当てはまらない	計
(VTSを受けて)					
1. 基礎学力が向上した	5(4)	39(30)	49(37)	7(5)	100(76)
2. 作文と会話能力が向上した	5(4)	51(39)	37(28)	7(5)	100(76)
3. 自信と自己主張の進歩があった	5(4)	49(37)	37(28)	9(7)	100(76)
4. 失敗を恐れない能力が身に付いた	12(9)	38(29)	43(33)	7(5)	100(76)
5. 他人とのコラボレーション能力が向上した	10(8)	53(40)	34(26)	3(2)	100(76)
6. クリエイティブな技術が向上した	12(9)	49(37)	35(27)	4(3)	100(76)
7. 会話能力が向上した	9(7)	53(40)	32(24)	6(5)	100(76)
8. 学習意欲が向上した	5(4)	38(29)	43(33)	14(10)	100(76)
9. 学校で楽しく学ぶことが増えた	11(8)	43(33)	35(27)	11(8)	100(76)
10. 自分の学ぶ態度が改善した	9(7)	42(32)	38(29)	11(8)	100(76)
11. 即興の能力が向上した	14(11)	54(41)	25(19)	7(5)	100(76)
12. 成績が伸びた※	3(2)	30(23)	53(40)	14(11)	100(76)
13. またVTSの授業があれば受けてみたい	17(13)	50(38)	21(16)	12(9)	100(76)

※「12」の項で、成績が伸びたと回答した人の具体的な教科は、英語8人、国語3人、数学10人、現代文3人、全体的1人、国語以外1人であった。



図1 VTSを導入した鑑賞教育の様子(1)



図2 VTSを導入した鑑賞教育の様子(2)

4. 今後のVTSを用いた高校美術の鑑賞教育

生徒達のVTSでの鑑賞に対する希望は、2015年で89%、2016年度で67%と好意的に受け止められ、高校美術での体験が貴重な生涯学習のリソースに繋がることが期待されると思われる。そのため、生涯にわたって主体的な鑑賞者となるように、さらに、その成果が他教科にも転移することを実感できるように、今後も授業に取り入れていきたいと考えている。

しかし、課題もある。例えば、以下のような課題が考えられる。

一つには、表2を見てもわかるように、スケッチを取り入れることには一定の効果が期待されるものの、時間内に納めることが難しい。絵の数を絞るか、説明の簡略化が必要であろう。

第二は、絵の選択をもっと吟味して、各教科との関連をつけながら取り組んでみることである。そのためには、他教科の教員との連携が必要になるのかもしれない。その場合にも、クラスによる進度の違いなどが新たな課題として考えられるなど容易なことではないが、VTSを例えば歴史の授業で実施するなど、方法を共有することによって、より広範な効果を期待できるのではないだろうか。

これ以外にも実践を進める中で課題が発見されると思われるが、試行錯誤をしながら検証を加えていくことにしたい。また、現在、美術教師をめぐしている学生にも提示し、中学校や高等学校の鑑賞教育の方法の一つとして提示していきたい。

(以上、新保)

註

- 1 桑村佐和子「生涯学習支援としての中学美術の役割についての一考察—対話による鑑賞教育の影響」日本生涯教育学会論集38、2017年、pp.71-80
- 2 フィリップ・ヤノウイン(京都芸術美術大学アート・コミュニケーション研究センター訳)『どこからそう思う? 学力をのばす美術鑑賞ヴィジュアル・シンキング・ストラテジーズ』淡交社、2015年
- 3 山口周『世界のエリートはなぜ「美意識」を鍛えるか? 経営における「アート」とサイエンス』光文社、2017年、p.215、pp.218-230

参考文献

- アメリカ・アレナス(木下哲夫訳)『みる かんがえる はなす 鑑賞教育へのヒント』淡交社、2001年
OECD教育研究革新センター編著(篠原康正他訳)『アートの教育学』明石書店、2016年

他

(くわむら・さわこ 一般教育等/教育学)
(しんぼ・じんぺい 美術教育法/非常勤講師)
(2017年11月7日 受理)